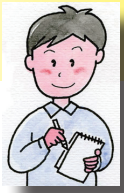


近世の京都

はじめに

天正 10（1582）年、天下統一を目指した織田信長は、家臣明智光秀の謀反による「本能寺の変」によって 49 歳の生涯を閉じました。

明智光秀は、羽柴（豊臣）秀吉との「山崎の戦い」に敗れ、京都小栗栖において落命したと言われています。

「山崎の戦い」に勝利した羽柴秀吉は、これまでの織田信長の意志を継ぐかのように天下統一へと進み、賤ケ岳（しずがたけ）の戦いを経て、織田体制から豊臣体制へと確立していき、天正 13（1585）年、「関白」に任命され、天下統一を完成します。以後、豊臣秀吉の天下統一から、徳川家康の江戸幕府の開府に始まり、明治維新による江戸時代の終わりまでの時期を近世と呼びます。

京の大改造

天下統一を実現した豊臣秀吉は、天正 19（1592）年、京の大改造を行い、これまでの条坊の半町ごとに南北に小路（突抜（つきぬけ））を通し、正方形の街区を長方形の街区に替えました。また京中の屋敷替えを強行し、京を囲むように土塁と堀を築造し、「御土居（おどい）」を境に「洛中（らくちゅう）」と「洛外（らくがい）」が生まれます。御土居によって商業と農業を分離し、洛中に大名屋敷が造営されました。現在、御土居は京都市北部の西加茂や鷹峯などに断片的に残るのみですが、南側の下京区などでも、発掘調査により御土居の基底

現在も残る御土居

部やそれに伴う堀跡などが見つかっています。

上京と下京を中心とした商業都市では手工業が充実し、多くの物資が京に集まり、その物資を扱う総合商社、高利貸を営む豪商（ごうしょう）が生まれます。高瀬川を開削した角倉了以は有名ですが、絵図などによると多くの豪商が店を構えていたようです。

近世の城跡

近世大名が築いた城跡は、近世遺跡として、早くから調査対象になっています。京都のみならず、全国的に見ても、近世大名の経営した城下町が母体となっている都市は多くあります。したがって、近世の城跡は、その地域の人たちにとって、もっとも身近な親しみやすい近世遺跡と言えましょう。

宮津市宮津城跡（宮津市教育委員会提供）

舞鶴市田辺城跡（舞鶴市教育委員会提供）

中世の城郭では堀・土塁などで防御していましたが、近世直前の織田信長は安土城で石垣を築き、天主を備えた本格的な城を築きました。信長の家臣である明智光秀は、丹波攻略の起点として亀山城（現在の亀岡市）を天正４（1576）年に築きます。亀山城は、豊臣氏の時期を経て江戸時代へと受け継がれます。特に江戸時代初めには天下普請

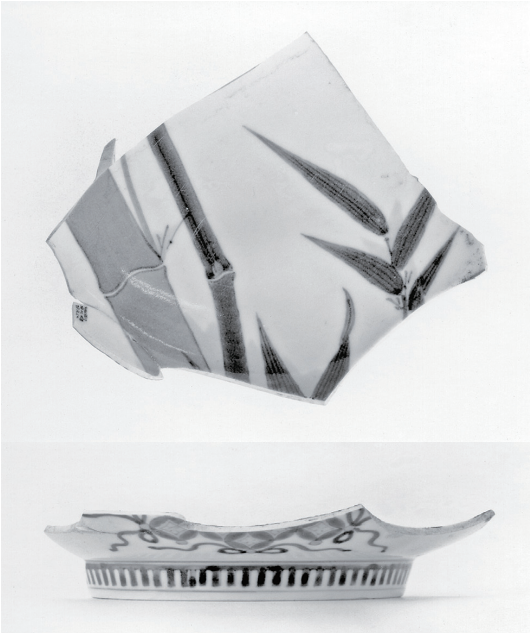
によって改修されています。これまでの調査で、中級武士の屋敷跡の地割などを確認しています。

明智光秀とともに丹波・丹後攻略を織田信長から命じられた細川藤孝は、攻略後に丹後国を与えられ、その基地として宮津城を宮津湾に面した海辺に築きました。

この宮津城は、関が原の合戦以後、京極氏などが城主となっています。発掘調査で石垣や堀の跡などが見つかっています。

最近の調査で、17 世紀前半頃に、頻繁に造り替えが行われたことがわかっています。同じ北部の舞鶴湾に注ぐ伊佐津川河口に築かれた舞鶴市田辺城跡は、細川藤孝の築造によるもので、今は市街地化していますが、本丸部分がその面影を残しています。発掘調査で良好な状態で残る石垣や堀跡などが見つかっています。また、石垣の基礎になっている胴木も確認されています。

丹波地域では、南丹市園部城跡で調査を行っています。園部城は、但馬出石から丹波園部に転封された小出吉親によって、江戸時代の初めに築かれ、以後、幕末まで小出氏の居城となりました。小出吉親は城主格の大名ではないので、正確には園部陣屋と呼ぶべきかもしれません。ただ、今に残る城門や隅櫓（すみやぐら）の様子は、城と呼んでも差し支えない景観です。城跡は現在学校敷地となっており、その改築等に先立って発掘調査を行って



南丹市園部城跡出土の鍋島

護岸された小さな池（三山木遺跡）

います。本丸跡では、石組の溝などが見つかっています。

それぞれの城の築造とともに、武家の住まい、商業地として城下町が整備されていきます。

地方村落

豊臣秀吉・徳川家康以降、武士と百姓が明確に区別されるようになります。京の町屋では工業・商業が盛んでしたが、都を離れた村落では農業を主体とした生活が営まれるようになりました。江戸時代の地方村落を考える上で、興味深い遺構が京田辺市の三山木遺跡で見つかっています。それは、丸太と板材で護岸された小さな池です。内部は丸太で４区に仕切られています。寛政９（1797）年の年号をもつ絵図に、この池と見られる池が描かれており、「クスハラ池」という池の名前が書かれています。池の名前のほかに、「浅井様入」とも記されています。浅井氏は、江戸時代に田辺地域に支配地を所有していた旗本クラスの小領主です。この池に何らかの利権を持っていたと考えられます。絵図には、このような小さな池が30か所描かれており、池の名前や公家、武家などの名前が書かれています。それぞれに何らかの利権が付随していたものと見られます。

京都周辺では古くから皇室領、公家領、寺社領などが複雑に入り組んでおり、それに武家領なども加わり、複雑な状況が見られます。このような小さな池の存在は、そのまま、江戸時代における山城地域の支配の形を物語るものと言えましょう。

福知山市戸田遺跡は、由良川中流域に位置する遺跡です。近年、由良川の洪水により大きな被害を受けました。この遺跡の調査で

は、江戸時代を通じて各時期の陶磁器類が多数出土しました。また、東南アジアからもたらされたと考えられる甕片も出土しました。これらの陶磁器類は、江戸時代に、遺跡周辺の地域が、由良川を使った水運による交易などで、かなり繁栄していたことをうかがわせます。今ではごく普通の集落ですが、かつては違う様相であったことも想像できます。同じ意味で、木津川流域に位置する木津川市木津遺跡でも同様の様子が想定されます。

錫杖が副葬された墓（中山城跡）

墓の様子

平安京ができると、京外の化野（あだしの）や鳥辺野（とりべの）に墓地を設けますが、中世以降には、時として屋敷の裏に中世の墓（屋敷墓）が見つかる例があります。近世においても屋敷地に墓の見つかる例があります。

都を離れた地域では、方形の座棺を用いた近世墓が見つかることがあります。庶民クラスの人々の墓と見られます。一方、舞鶴市中山城跡では、小さいマウンドをもち、錫杖（しゃくじょう）が副葬された、僧侶もしくは修験道に関係する人の墓も見つかっています。また、京都市内の法成寺跡の調査では、花崗岩の切石を用いた石槨（せきかく）の中に銅板張りの木棺を納めた、立派な墓が見つかりました。公家の墓と考えられます。

近世は、多くの文献があり、都市・村落の様子が文献資料から語られていますが、考古資料からもその様子を覗い知ることができます。

（引原茂治）